

暗室技術と写真作品

加藤袋
Fukuro Katou

加藤袋

無料配布小冊子

制作なにか

#1

手に取っていただきありがとうございます
最後のページに 皆様へのおねがいが掲載されています

暗室技術と写真作品

加藤袋 無料配布小冊子

制作なんとか

#1

加藤袋
Fukuro Katou

まえがき

暗室や銀塩写真というと、狭くて暗い部屋に独り、薬液の中で紙を泳がせると像が現れてくる……というような映画のワンシーンを思い浮かべるのではないかと思います、まさにあの感じです。

よほどのことが無いかぎり暗室に立ち入る機会なんて訪れないものですが、暗室はそれぞれの性格が色濃く反映された個性的で楽しいところですよ。暗室が暗いのは、フィルムや印画紙など、光に反応してしまう品物が外気にさらされる間だけで、それ以外の準備をしたり処理をしている間はごく普通に電気をつけて明るい環境で作業をします。

暗室はプリンターにとつてのアトリエのようなもので、もし他所の暗室にお邪魔して独りで作業ができるなら、きつとその暗室の持ち主の心を覗いているような気分になることでしょう。

光に触れると反応する薬品のことを感光乳剤と呼びます。これをポリエステルや紙といった支持体に塗り付けたものがフィルムや印画紙です。

カメラはフィルムを装填する場所に光が入らないようになつていて、レンズを通して入ってくる

光の形状や強さが、シャッターが開いている間だけそのままフィルム上の感剤に残るようになっていきます。暗室は大きな大きなカメラの中に人が入っていて、その中で、印画紙に焼き付けたい光の形状や強さを与えているようなものです。

カメラは目の前にある光景が反射している光をフィルムに与えますが、暗室の場合は「引き伸ばし機」という電球が入っている機械の中にネガをセットして、そのネガを通過した結果としての光を印画紙上に与えます。

カメラと暗室は非常によく似た働きをしますが、カメラは刻一刻と変化する自然現象をそのまま一瞬でフィルムに記憶させるのに対し、暗室はもう動かないネガという静止像を、何度でも好きな時間をかけて印画紙に思い出させられるという大きな違いがあります。

この世の現象を直接に記憶する瞬間は一度しか訪れませんが、それを思い出すことは、それからいつでも何度でもどのようなにも可能なのです。

このネガという記憶を印画紙に像として思い出させる作業、その間に起こし得るさまざまな工夫の数々が「暗室技術」なのです。

まえがき 2

① 加藤袋のこれまで

はじまりのショック 6

上京と人々との出会い 10

自分自身の道具 14

遺影オフ 18

プリントしなさい 22

三鷹シェアハウスの結成 30

デザインフェスタ出展 34

② 加藤袋とインターネット

加藤雅子ちゃん (@katarinax) 38

Mさん 39

スープちゃん (@S_soup) 40

壱ちゃん (@00oEnvy00o) 42

しもゆきちゃん (@shimoyuki_) 44

小野ほろひちゃん (@onoholiday) 45

Raswellちゃん (@Luzwell) 47

伊丹松圭太ちゃん (@portabletermina) 49

尊師ちゃん (@drrrip) 50

彦坂一慶ちゃん (@osoroy) 51

③ 加藤袋のこれから

これからつくりたいもの 54

あとがき 58

① 加藤袋のこれまで

はじめりのショック

絵を描いたり、曲を書いて歌を歌ったり、楽器を弾いたり、踊ったり、物語や文章を考えたり、映像を撮ったり、様々な作品づくりを通して、自己や世界中の何かを表現したいと思う人々がいる。



腔外射精アルバム

これが加藤袋の制作のはじめりに位置することになった、思い出深い「ショック」の記録だ。
電子情報としてのホームページは消失するかもしれないという危機感からプリントアウトして保存していた。

制作の道に興味をもつようになった大元のきつかけは、あるショックを得たことだと、その瞬間から現在に至るまでずっと思っている。

愛知県の知立市というところに生まれて十九歳くらいまで地元で暮らしていたが、その中で夢中になっていたものというところ、アルバイトと漫画とゲームとレンタルビデオ、そしてバイクだった。十六歳になってすぐに中型二輪の免許を取得して、バイクの部品を取り替えることと、オーディオ製品を買い替えることに消費の快感を見出していた。今思うと当時の自分はいわゆるスペック厨で、雑誌に載っている数値や、既に立派な他人が評価を与えていることでしかモノの良し悪しを感じていなかったように思う。



完全にオシャカになったバイクとある漫画にちなんで伊藤しげると名付けていた。しげるといふ名は重要な道具に代々世襲されて、現在は主に使用しているカメラの名前が伊藤しげるになっている。

数字に魅せられた何も考えていない小僧がバイクを乗り回すとどうなるかというところ、事故に遭う。実際にそうだった。空中を縦に二回転している自分をスローモーションで他人事のように観察しながら、短かった人生の走馬灯を見た。たまたまガードレールが途切れていたところに飛び込んで右のふとももをへし折っただけで済んだのだが、その後の措置や手術やりハビリの日々の面倒や苦痛は、思い出すと今でも陰鬱な気持ちになるものだった。そしてあるショックとは、このリハビリの日々のさなかに起こった。

当時は自分専用のパソコンを持つていなかったのだが、バイクにも乗れず何もすることのない毎日を慰めるために、雑誌で一目惚れした白いマッキントッシュ

シュのノートを買った。用があるときにだけ借りる装置としてのインターネットではない、自分だけのネットワークを手に入れた最初にしたのは、キリがないということ。現実の世界の方がよほど無限でキリがないものだけど、どうしてかその時には、小さなノートパソコンの画面の向こう側にどこまでも広がっている無限にたいへんな興奮を感じた。

個人が勝手に発している自由な表現というものに触れる喜びの渦の中で、吾孀童孝という人の「膺外射精」というイラストサイトに辿り着いた。不気味で、何を感じて考えて、どのようにかこれらを描いたのか、一切理解できない驚きと恐怖とともに、それまでに感じたことのない、今でも感じている重要なシヨックを得た。

それは今でも、いつまでもうまく言葉にすることはできない種類のものだけど、ありありと感じることができると。それは人と人とお互いに分かれたれていることに起因する、人が人に何か伝えなくてはならないという仕組みの中で、何をどう表現す

るのかという具体的な手段のセオリーを無視した、他人が理解するとされている記号を並べ替えるような信号遊びに囚われのない「新しい」とは真逆の「根源的な」信号の発信のように思えた。それを体感的に理解しているながら、理屈では何を理解しているのか自分自身で説明できないし、辞書を引いて「理解」という項目を熟読してもどこにもこの感覚のことは書かれていないのに、たしかに自分がこの人の表現によって何かを「理解」しているという現象に強烈なシヨックを受けて、これは何なのか？ということを熱が出そうなほど考えた。

しかし考えれば考えるほどに、自分がそこから遠のいていることしかわからず、何度も何度も「膺外射精」を訪れては、そのあいだ何かを理解？している自分に戸惑う日々が続いた。

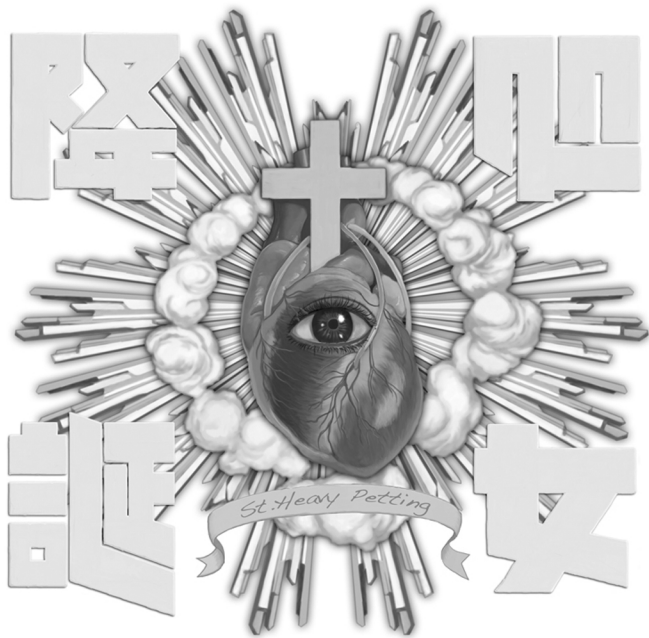
このときから現在まで続く、「説明できるなら説明すれば終わる」という自分自身のスタンスは変わっていない。

ただし、限界まで説明することだけが説明できない何かを逆説的に説明するという条件付き

About Me	はものちゃん	48	tumblr	twitter	T-shirts
----------	--------	----	--------	---------	----------

処女降誕

2013-10-17 (木)

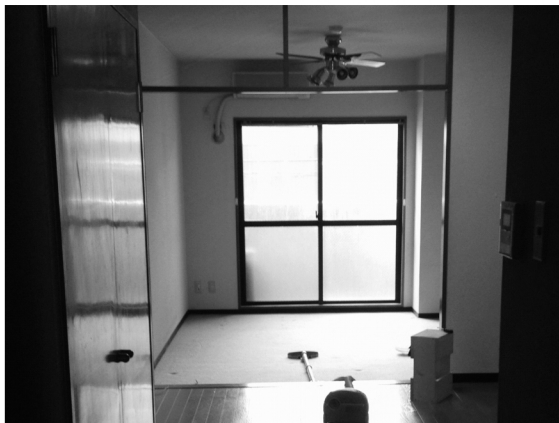


であり、表現できないということとを表現するために表現し続けるという自分の人生観に転じているように思う。

ただひとつ感じる「ある何か」を追いかけて、自分も何事かによつてそれを「表そうとしなければ」ならないんだ！とはつきり決めた。

今思えば、あれは「鏡」を初めて見た瞬間のようなもので、彼が何なのかを理解できないという現象に反射されて、では、この自分自身は何を感じているのか？ということをも、自分でも表現していないということも理解した瞬間だったのかもしれない。

「ドアノブ少女」を手がけた頃から写真のコンテンツも増えた。当時ここを食い入るように見つめていた頃の自分に、近い未来に彼らとの集団でシェアハウスをするようになると告げても信じられなかっただろう。



この川崎のワンルームマンションでたくさんのが起こった。この狭さが、のちのちまで続く暗黒の背景を選択させたと言える。それしかなかった。



実家にいる弟が捨て猫を拾ったら殖えて、そのうちの1匹を東京で飼うことに。リンという名前は母ネコからそのままもらった。おリンリ又ス卿とも呼ばれる。



上京してすぐに知り合っとうちに転がり込んできたスूपお姉さん。ゆくゆくは彼女の恋人との3人でワンルーム共同生活することになる。



スूपお姉さんが片付いたあと、長野から上京をしてきた工藤さんと暮らす。彼はのちに恋人と他の部屋で暮らすようになったが、静かで楽しい日々だった。

上京と人々との出会い

上京してから起こったことは、友人との出会いと、陰鬱な業務の日々と、仕事としてのもづくりと、趣味としての制作の模索と、インターネットと、インターネットと、インターネットだった。

スーポお姉さん

彼女は詩家であり、過去にはその詩性を買われて詩集も出版されている。

川崎へ移動している電車の中で、ミクシイのメッセージを受け取った。このメッセージの送り主が、のちほど共同生活をすることになる人物だった。

当時はミクシイに夢中になっていた、吾孀童孝のコミュニティを作成し管理していたことで、彼女はその管理人に興味を持ったという。

彼女と初めて実際に会ったのは、免許証の書き換えをしに行ったもののお金が足りなくて帰ってきた日で、彼女に対して「まず最初に口にした言葉は「お金貸してくれない？」という最悪



彼女にとって便器さんは大切なパートナーだ

なものだったが、現在まで縁の深い友人でいてくれている。

彼女は陸外射精を長いこと見続けている人物のひとりだった。のちに彼女がきっかけになつてカメラで写真を撮るようになり、また彼女は他のカメラマンの被写体としての活動をするようになった。

そして彼女が「ドアノブ少女」の被写体になつたことをきっかけに、吾孀さんとの出会いに繋がることになる。

この人は本当に厄介な人物で、あのエキセントリックな文章は本当にそのまま湧き出ているのだろうと思わせる。彼女と同じ空間で生活してまともでいることはとても難しく、それを克服するために、逆にたくさんのことを学ぶことができたとは今思う。(今だからだが…)

人との関わり方という人生において大切な要素の多くを彼女に学ばせてもらった。

デザインフェスタ[®]への出展の際には彼女からの紹介文をいただいた。彼女の人格が垣間見える怪文である。

吾孀竜孝のコミュニティを作ったことでできた縁はもうひとつあって、のちのち三鷹で共同生活することになるユキちゃんとの出会いだ。

彼は絵描きで、当時「ベーコンさん」というその名前からは一切内容が予想できない謎のイベントを独りで開催しており、ベーコンさんって何だろう…と無性に気になって、彼にコンタクトを取った。すると光栄なことに「ベーコンさん」に参加させてもらえることになった。ベーコンさんとは、首から画板をさげた状態で公園を走り回り、フィジカルの限界に挑戦しながらも同時進行で絵を描くかどうか？という実験イベントだった。



彼の愛猫であるネギちゃん つやつやしている

彼が走っているという公園に少し遅れて到着すると、向こうの方から彼が走ってくるのが見えた。ひとまず挨拶をしようと手を挙げてアピールすると、彼もこちらに気がついたようで、手を振って近づいてきた。そしてそのまま目の前を通り過ぎて、長髪を振り乱しながら反対側へ走り去っていった。いなくなつてしまった衝撃を抱えたままもう一度帰ってくるのを待っていると、今度は止まってくれた。寒い時期だったが走り込んでいて汗をかいた彼は、かぶつていたキャップを髪の毛ごと脱いだ。なんとさつきまで振り回していた長髪はカツラで、丸坊主の本人によると「暖かいからかぶつている」とのことだった。

こいつはただ者ではない！！という衝撃を二度も喰らった後は居酒屋で意気投合し、今でも縁の深い付き合いが続いている。彼もまた、膺外射精にシヨックを受けた仲間だった。

彼にツイッターをやれ！と言われたことがきっかけで、その日からツイッターを始めた。

工藤さん

工藤さんは音楽をつくる人だ。すべての楽器を独りでこなし、録音して一曲を仕上げる。

自分自身の制作はカメラと写真にあると発見し、精力的に制作してツイッターなどに発表していた中で、分野は違っても制作行為に対するモチベーションとか、考えることに共感を持ち合えるような縁もできてきた。

工藤さんはその最たるひとりであり、地元の長野から二度目の上京をしてきた彼との共同生活は望ましいものだった。

初めて彼が川崎の自宅に訪れたとき、駅まで迎えにあがったあと、その帰り道で警察官に呼び止められ、生涯初の職務質問を受けた。君たちはなんだ？ど



工藤さんの依頼でこしらえた木製制作デスク

これから来た？という警察官に、「な、長野から来ました！」と答えるのに笑ってしまいそうで大変だった。近所にあつたあやしげなDVD屋さんに武装強盗が入って、怪我人は出なかつたけど警戒を続けているとのことだった。出会って4分で職質！というのはいまだに語られる笑い話のひとつである。

いろんな音楽を聴くとき、この曲を作ったのは自分なんだと思いついて聴くという空想をして楽しむことがあるが、車の中で彼の曲をかけながら一緒に歌っている、この歌がこうなつた理由みたいなものが、その歌をそう歌うこと以外では説明できない、そう「なっている」という感じに心動かされること

がたくさんある。
写真と音楽とではずいぶん具体的な作業は違うけれど、どうして作ってしまうのか？人の一生とその制作にはどんな関係があるのか？というところに共感する部分がたくさんあつて、お互いの制作を応援し合える良い関係であり続けている。

自分自身の道具

制作をする人に限らずとも、人々は自身自身の手指の先に存在すべき「道具」を探し求めている。それが絵筆なのか、マイクなのか、靴なのか、哺乳瓶なのかはわからないが、手は何かを求めている。



思い出の一枚

身内でなく、被写体をやりたいと外部からやってきてくれた人を撮った、初めての「撮影らしい撮影」で撮った写真。当時は多重露光を好んでいた。現像からあがってきたこのネガを見た瞬間、自分はこの手にカメラを持って生きるんだと肚が決まった。

写真は嫌いだった。運動会や遠足の後に廊下に貼り出された写真を見ることもしなかったし、学年の集合写真なども、自動的に配布されるもの以外には見向きもしなかった。自分自身の姿がそこに写っているという想像をするのが嫌だったし、人々は自分たちの姿を残すために、鏡を見るように写真を撮るのだと思っていた。

反面、映画が好きだったのは、役者が役を演じていて、その人がその人でなくなっているという現象に惹かれていたような気がする。

思えば、自分で写真を撮り始めるまでは、写真が「作品」であり得るといふ発想を持つことができなかったのだろう。

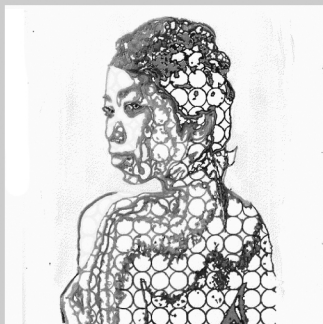
写真を撮り始めるまでは、自分でも何か表現としての制作を

しようと色々考えて、絵を描いたりCGをやったり楽器をやってみたりしたが、どうにも誰かの何かの良さを借りているような気がして居心地が悪かった。

仕事の現場がテレビ局に移動してからは、朝からロケがあるその前夜に、仕事に使うビデオカメラを一晚自宅に保管しておくことが多くなったので、その一晚だけ仕事道具を少し拝借して、徹夜でビデオを撮って編集するということに興じていた。

好きな音楽に勝手にビデオを当てて動画サイトに投稿したりしていたが、音楽が原因で削除されてしまったり、根気が続かずに「一晚で撮れるもの」しか撮れなかったりと、とても面白いくと感じてはいたものの、あまり思うようにはいかなかった。

アイデア次第ではあるけれど、



当時やっていた水彩画とCG。
何かやるぞという気持ちはあったけど「表したいもの」に注意が向かわず、とても半端だった。

たった独りでできることには限度があるようにも思えたし、次第に自分一人だけできちんとコントロールできる制作でないとずつとやつていくことは難しいのではないかと考えるようになった。

あるとき、当時共同生活をしていてマミさんを何気なく携帯電話のカメラで撮影したところ、本人がいたくその画像を気に入り、それに気を良くしてカメラを買おうかなと考えた。しかし慢性的にお金がない日々を送っていて、とてもいいカメラなど買えないことがわかっていたため、当時流行していた安価なトイカメラを買うことにした。

某サブカルショップに足を運ぶと、プラスチック製のいろいろなカメラが陳列されており、それぞれに使用するフィルムの種類が違ったり、写り方に差があることを知った。なんだかんだで、ボディの可愛さと、各モデルで撮影したというサンプル写真の具合を考慮して、ホルガというモデルを購入した。

生涯初の一本目のフィルムをカメラに詰めて、マミさんと外に出かけた。ホルガはシャッタ

ースピードだとか写りの調節を殆どコントロールできない。指を押ししている間シャッターが開き続けるという鬼仕様で、カメラの理屈をまったく知らなかった自分が撮ったものは写りとしては微妙なものだったけど、大きな発見があった。現像されたネガを受け取ったとき、自分は写真を撮っているのと同時に、ネガを作っているのだということに気がついた。

撮りたいものは最初から人物であり、人物しかなかった。当初から「自分でコントロールできる制作」を目的にしていたので、どこかへカメラを持って行って決定的瞬間を収める、というのはまるで考えておらず、カメラの性能としても、三脚を据えてゆっくりじっくり撮らないと普通に写らないという制約もあった。とにかく少しずつ撮れるものから撮ろうということを考えて、真つ黒な毛布を吊るして、それを背景に人体を撮影し始めた。

そしてせっかくなアナログだからとモノクロを試して現像に出したとき、モノクロフィルムの「ネガ」がもつ美しさに驚いた。

暗黒を背景にしている部分は綺麗に透明になって、白い肌だけが黒くネガの上に残っていた。

カラーのネガは茶色くて、ネガだけ見てもほとんど内容がわからない。でもモノクロは違うんだということを知って、そのネガの物質的な美しさによってモノクロをやっつていこうという考えに落ち着いた。ちまちま時間を見つけては撮影をして、ネット上にデータを公開していたのだが、面白がってくれる人がちらほらいて、次第に被写体をやりたいという話もちかけてくれる人が出てきた。

初めて外部からきてくれたモデルさんを撮ったとき、それが自分にとってすごく印象深いネガになった。

これが撮れたということとは、撮れということに違いはないとい



透き通ったネガ この透明が「黒」になる

う気持ちになつて、自分の道具が見つかったような気がした。

しかしその直後にホルガが不幸な事件に巻き込まれて破損してしまい、カメラがない！という事態に陥り、しつかりしててずつと使えるカメラを探し始めた。中判フィルムのカメラ自体がそこまで多くの選択肢を用意していなかったが、調べているうちに目について、もうこれしかない！と一目惚れしたカメラが、今でも使い続けているゼンザブロニカだった。

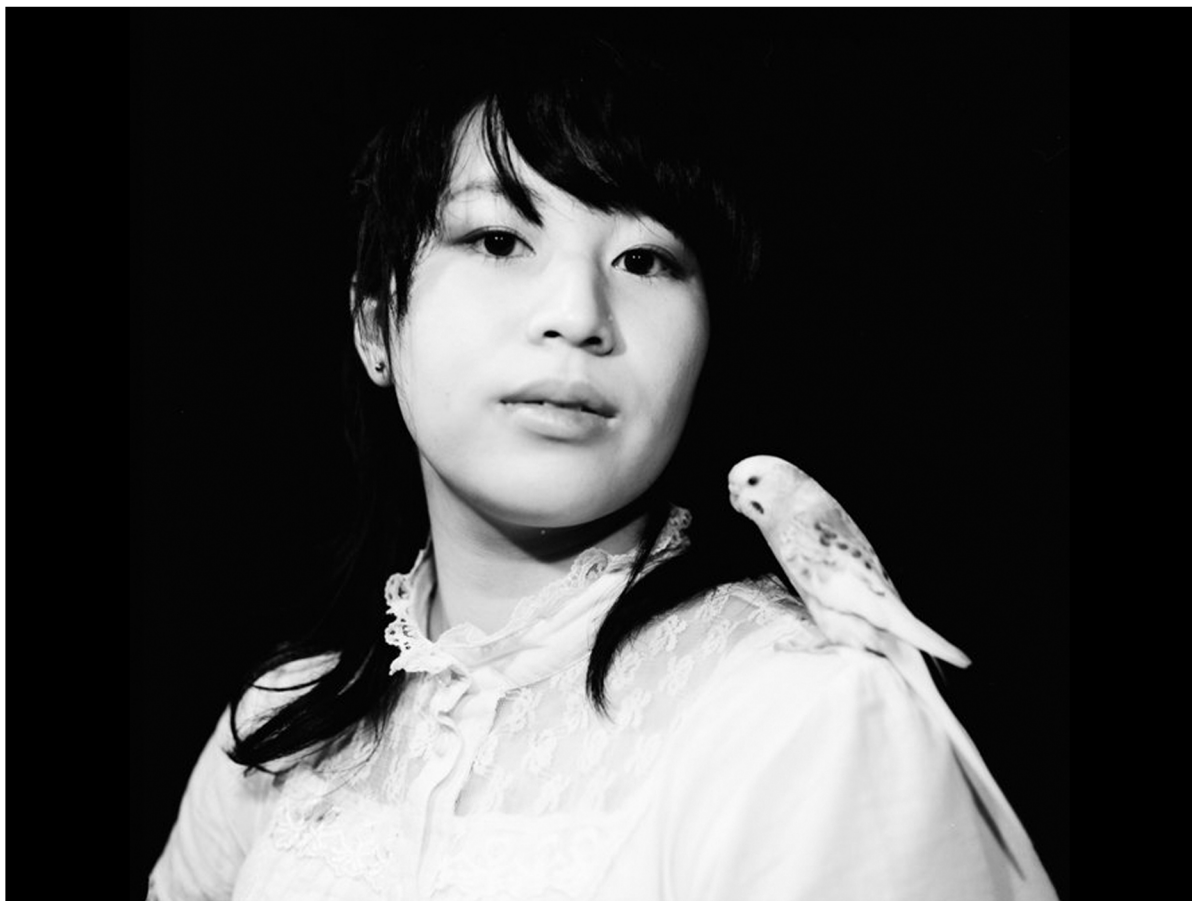
初めてオークションサイトを利用し、相場を確認する日々が続いた。しかしカメラが用意できたとしても、モデルさんがない。

顔を撮らず、自分がモデルになつたということもわからないような写真のモデルになりたい人なんていないだろうと思っていたが、不思議なことに、ひとり撮っては次のモデルさんが出てきて、また撮っては次のモデルさんが出てくるというありがたい連鎖が起こりつつあった。

何人か撮影をさせてもらいう内にすっかりカメラの虜になつて、ネガの世界に引込まれていった。

遺影オフ

被写体の顔面を一切撮らないことを信条としてそれまで一貫した制作が続けていたが、突如として「顔面を撮ってみたい」と一念発起して参加者を募ると、意外に集まった。が、その初日に震災が発生！



或る遺影

顔面を撮るのはとにかく緊張した。指がこわばってシャッターが切れない。

そして、シャッターを切っているのは指の筋肉だとか環境の条件だとかタイミングではなく、この心であることを確認した。

あるとき、人の顔面を撮った
らどんな気持ちになるのだろう
ということ考えた。多作とは
言えないまでも、それまで一貫
して被写体のパーソナリティだ
とか顔面性を削いだ「肉と骨」
という被写体ばかり撮影してき
たのに、どうして他人の顔面を
顔面として撮影するという真逆
の行為をしようと思ったのか。

それは結論から言えば、顔面
を撮影することで、これまでの
匿名性と対になる表現を通して、
両側から研ぎ合うようにして、
逆に肉体への意識に役立つので
はないかと考えたからだだった。

参加者を募ったところ、想像
以上に多くの方がわざわざ川崎
の自宅まで訪れてくれて、たい
へん嬉しく思った。遠いところ
からではなんと鳥取県から来て
くれた人もいた。



或る遺影の実物

遺影はごく簡単な額装をして、
黒白のリボンをかけて贈った。
当初はメメントモリ的な願いを
こめたつもりだったが、あまり
にもタイムリーすぎて、慎みに
欠けていたかもしれないと思う。

参加者が多かったため、一日の
時間割を決めて時間差で数人ず
つ入れ替わりで撮影をさせても
らう段取りになっていたのだが、
この初日の第一陣が最寄り駅に
到着する予定が、二〇一一年の
三月十一日、十五時だった。

そろそろ到着するところかな？
と思つて駅の前で待っている
駅の改札の上に吊られていた非
常灯が落下するほどのものすご
い揺れがきて、相当焦った。

電車で向かつてきていた3人
全員が既に到着した後のことだ
つたようで、何とか全員無事に
合流することができた。

自宅からほんの少し離れたと
ころまで停車しており、とても
帰れない状況だったので皆で雑
魚寝をしたのは、ある意味思
い出になった。

当然その後数日間にわたって予定されていた遺影オフは命名の不謹慎さもあつてすべて取りやめになり、それから月日が経過して改めて実施した。

写真に限らないことだけど、制作をやっていると、その制作を自分自身で理解しようとしたり、また他人に説明しようとして、言葉や意味や、別の何かに変換しようと試みるが多々ある。

写真にまつわることを敢えて言葉で説明し直すという写真への叛逆、言葉で説明できることを敢えて写真で表現するということは、写実を逆側から検証して捉えることであり、引き算のフィードバックが得られるように思えることがある。

それまで撮影を通してつらぬいてきた信仰のようなものに真つ向から反する遺影オフだったが、結果的に、むしろ大きな流れの一部としてとても得難い経験ができたように思う。

他人の顔を撮るといふ行為により、新しい発見がいくつかあった。身体を撮影しているときと一番違ったのは、ファインダー越しとはいえ、他人の眼の光に射抜かれながらシャッターを

切ると、自分の方が撮られている気持ちになるのだということ。像としての誰かと自分の心が、ファインダーの中で視線を結び合うことには、自分と「自分の中の彼や彼女」との関係性が映されていて、それを切ると心に決めた瞬間にシャッターを切っている、自分自身を撮影しているかのような気持ちになつたということ。

肉眼がすぐそこにいる被写体を見る像と、カメラがファインダーに映している像とが、まったく違つて見えること。

これらの発見を通じて、やっぱり人間は自分自身の心の中に映っているものを見ているんだということがわかった。

カメラは光学的な事実を偽りなく写すのに対し、人間の眼という装置は自分自身の心を視ているということを強く感じた。

自分は写実するカメラという機構に自分の心のうちという虚像を映し込むという矛盾を行っているが、その矛盾こそがカメラと創作の巡り会いでもあつて、写真表現なのだということ、自分なりに納得したように思う。



或る遺影

身体の方のモデルさんには「自分自身の肉体であると認識できない」ことに驚いたり喜んだりしてもらえることが多い。ところが遺影オフの反響はまったく逆で「自分自身がこのように写る」ということを喜んでもらえたように思う。



プリントしなさい

これまでは撮影することだけに意欲を傾けていて、ネガをプリントにするという考えはまったく持っていなかった。それはひとえに、プリントをおこなう意味にまるで注意を払っていなかったからだ。

自宅の暗室

暗室はプリンターにとってのアトリエであり、ネガという記憶を何度も何度も思い出す場所でもある。それまで撮りためていたネガが、はじめて「ネガ」としてその機能を発揮し始めたのは最近のことだ。



ネガの選定と今までのレシビ確認 作業内容の予想



カーテンを部屋の入り口に移動 机と道具を広げる



大全紙プリントの行程 全体が押入に収納されている

遺影オフの参加者の中に、自身でもネガを作っており、そのネガを現役のプリンターにプリント依頼しているという方がいて、せっかくネガを作っているのにプリントをしないのは勿体ないから、是非とも暗室を構えるなり、よそにプリントの依頼をするなりして、像を紙にしてみるべきだと強く勧められた。

それまでの認識としては、制作行程が途中から中途半端にデジタルになるせいか、最終的な出力を紙にするとしても、せいぜい以前キンコーズに出力を頼んだときと同じようなものだろうなと考えていた。

紙にしたとして、それを展示などをするつもりも機会もないし、いたずらにお金を使うばかりで、それなら撮影の費用に回したいというのが本音だった。

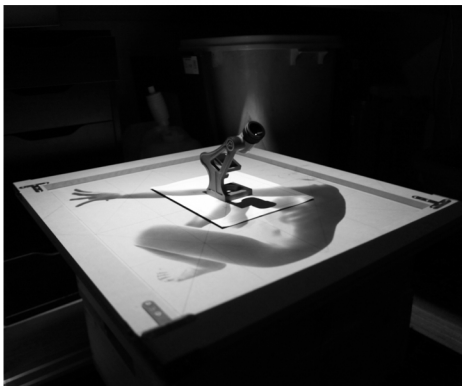
そのようなことを説明すると、ネガを貸してくれと頼まれた。

自分がプリントを依頼しているところに持って行って、実際のプリントにさせてみてほしい。

プリントになったものを見たい気が変わると思うからと切々と説かれて、そこまで言うならといくつかのネガを預けた。



露光する直前まで作業を進めてから薬品を希釈する



イーゼルに投射して倍率を決定 ピントを合わせる

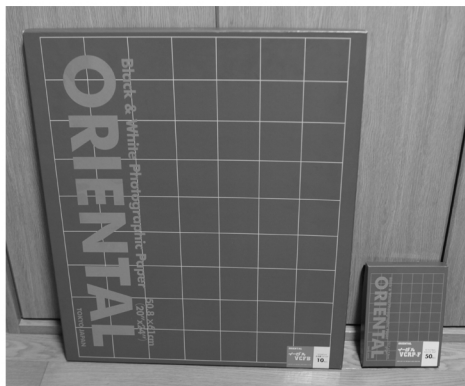


ネガをキャリアにセットする 埃の除去に苦悩する

後日、そのプリントは綺麗に額装されて届いたのだが、一瞥みて即座に考えが変わった。見たことのない像が、というよりも、見たこともない「黒」が濃密に焼き込まれていて、自分で撮ったネガから生まれてきた「写真」に息を飲んだ。今でもそのプリントは暗室の壁に飾ってあるのだが、ときどき近くで見直して、目標の確認としている。

それから少しずつ暗室機材を買い求め、ひと揃いしたところに、元写真部で以前モデルさんをしてくれた方がプリントの基本的ないろはを教えてくださいました。

最初は、うすぐらい赤灯の下でフワッと浮かんでくる銀の像に興奮し熱狂したものの、すぐに行き詰まった。プリントは感性頼りの撮影とは違って、地道なオペレーションの積み重ねの性質がどちらかといえば強い。強いというより、物理や化学としての薬品反応や作用の理屈が身について初めて、プリントそのものに感性の差が出てくると言っている。無論、撮影にも地道なオペレーションと光学についての理解が無ければ物体の性



大全紙はとても大きい！右がテスト用の葉書サイズ



テストプリント 詳しく記録して内容を蓄積する



準備が整い、タイマーのSTARTを押すと露光される

質として良いネガはできない。そういう今までおろそかにしていたことがドサツと一挙に降り掛かってきたように思えて、立ちほだかるものを迂回するようにはプリントに対する意欲が萎えていつてしまうのを感じた。逃げるように「いつも通り」の撮影をし、いつも通りのデータを作り、そしていつも通りの達成感を得ながらも、自分のネガに対する後ろめたさを覚えてしまつてからというもの、撮影自体にも気後れるようになった。撮影は撮影、プリントはプリントで、ちまちま進歩できるように手は入れていたが、とにかくわけがわからず、まったく思うようにならないという日々が長く続き、正直な感想としては、なんでこんな、しんどくて、面倒くさくて、細々とした出費に悩むようなことをしているんだろう…という感じで、過去のネガなんてなおさら既に発表したスキャンデータがあるんだしいじゃん…という気分になつて、ろくにプリントせずにならぬ暗室を畳んでしまつたりしていた。一時期は、もういやだ！と思つて引き伸ばし機を部屋の床に



ワイパーで水分を切って銀を保護する薬品に浸ける



現象・停止・定着処理を終えたら流水にさらして洗う

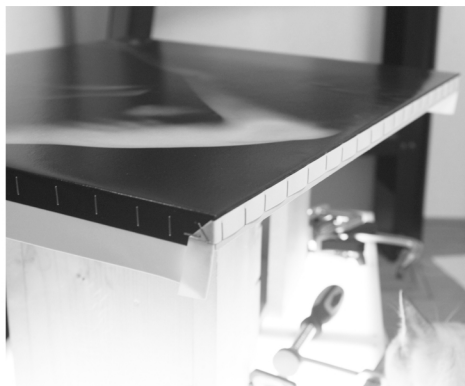


丸めた紙を塩ビ管に詰め、薬液ごと転がして現象する

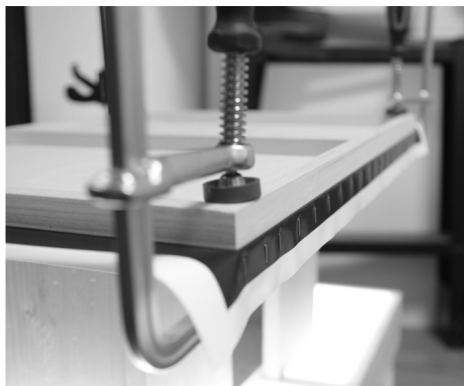
おろして布をかぶせてほつたらかしていた。とにかく大きく感じられた要因としては「思うようにならない」という一点に尽きていて、しかも（こうしてみたらどうだろう？）とか（こうしたときとどうするときの比較をしてみよう）とか（自分で確認した結果のデータや統計を吟味してみよう）という各々の動作がめっちゃくちゃ面倒くさくて、なぜ面倒くさいと感じるのかというところ、デジタルデータをいじくり回す方がはるかに簡単で、早くて、お金がかからなくて、一時中断しやすくて、何より発信しやすかったからだと今になってみて思う。

思うようにならないと感じてはいたものの、ではその「なつてほしいイメージ」つまり、自分がどういう像を印画紙に結びたかったのか？というところ、その時はそれまでに自分自身で慣れ親しんでいた、過去に自分で発表した自分のネガのデジタルデータとしての像を暗室で作る直そうとしていた、ということに後から気がついた。

わざわざ暗室を構えてまでネガをプリントにしようとしてい



水で膨張した紙は乾くと縮んでピンピンに張りつめる



同じパネルで押さえる 四方をガンタッカーで打つ



木製パネルに載せ 光に透かして紙位置を合わせる

るのに、どんなプリントになるべきなのか？というイメージが「既に以前自分で作ったデータのやり直し」なのだから、そういう心意気のまま暗室にいても「最高にうまくいったとして、やつと過去の自分に追いつく」という構図なのだから、面白くなるわけがなかった。苦痛に感じるのも当然のことだ。しかしこれは今になって思えることで、当時はなぜ苦痛なのか本当にわからなかった。

デザフェス[®]は「せかオム」ブースに参加するというかたちだったが、本格的にやる気になったのが開催まで残り百日を切った段階で、とにかく形にしないと話にならないという焦りもあり、一旦自分にとつての暗室のあり方について真剣に考えてみて、やつと前述の理由に思い当たったような感じだった。

撮影するまでと、撮影してからを完全に分離して、自分は生まれて初めてこのネガに出会ったのだと思ひ込み、なおかつ、これは自分で撮ったネガではないとまで自己暗示するような面倒なことをしないと、撮影という脳内イメージを外に出す行為



プリント完成！

パネルに水張りする仕上げはフチまで黒くなるため気に入っている。
マットに入れると白枠がついてしまい、どうにも落ち着かない。



完全に乾燥したらパネル側面を黒の水張りテープで覆い隠す

と、既に外に出てしまったネガを自分のイメージとはもう関係ないただの物体として素直に向き合う行為を区別できなかつた。それまでの、撮れさえすれば良いという流れが染み付きすぎていて、これを忘れないと（忘れるというか違うことをやっているのだという自覚ができないと）新しくなれないとハッキリ理解してからは、かなり順調に暗室技術に対しての意気をコントロールできるようになって、今も順調に続いている。



たくさんの写真たち

デザフェス38の次点で加藤袋にプリントすることができる最大サイズの写真たち。

ただ大きいだけではなく、どうして大きくなくてはならないのか？をその存在で語ることができるようなプリントを目指したい。

三鷹シエアハウスの結成



ハウス近影



コアになっているメンバーは東さんとコキちゃんとか藤袋の三人で、他に1~2名が流動的に入れ替わっている。

三人が飼っているどの猫も性格が違って、それぞれ振る舞いがまったく異なる。左から、みつくに♂・ネギ♀・おリンリヌス卿♂

上京して以来もろもろの共同生活を過ぎてきたものの、本格的なシエアハウスになるとは考えていなかった。しかもその発起人は、あの吾嬭電孝本人だった！デザインフェスタを中心に活動している。

吾孀竜考さん（東さん）からシエアハウスを始めないかと持ちかけられたのは、川崎のワンルームマンションに住み始めて4年目のことだった。その頃はちよūd、引つ越すか、それとも更新してそこに住み続けるかの計画をし始めなくてはならないタイミングであり、そのオフアー自体もこれまでの人生を振り返るとあまりに興奮するものだった。二つ返事で乗り気を伝え、日を開けずに居酒屋で再会を果たした。

再会というのも、東さんに直接会うのは二度目だったからだ。初めて顔を合わせたのは、彼が「ドアノブ少女」を手がけていたころ、当時同居していたママさんがその被写体に応募したことがきっかけになり、川崎の自宅で撮影をした日のことだった。それまでも、東さんに直接会って話せるような機会は幾度もあるにはあった。彼は集団でのオフ会として花見を催したり、取り壊しが決まっていた当時の彼の住居の壁に参加者が自由に絵を描くイベントを開催したりと、外部との接触や交流がもてるイベントを企画していた。

ちなみにユキちゃんは東さんの花見イベントに参加したことがあり、その話を聞いて、度胸のない自分は彼をたいへん羨んだ。その花見の際にユキちゃんには東さんに色紙をねだり、東さんは「とにかく落ち着け！」と書いたという逸話が残っている。ドアノブ少女の撮影は自分の記憶の中でも記念碑的な位置にあり、彼と同じ題材を使って競作をした経験は、たいへん良い思い出になった。

以前から、東さんと直接に関わりを持つことがあるとするなら、それは制作の場で叶えたいという想いがあったので、ひとつの夢が実現した日と言える。それから特段交流を深めたということはなく、お互いの制作をそれぞれに続ける日々が続いていたのだが、シエアハウスをもちかけられることが再会する機会となった。

ドアノブ少女のときはゆつくり話す時間もなかったもので、このときはお互いに制作の話をしたり、人として共同生活ができるのかどうかの感覚を確認したりなど、それから始まる新生活についての青写真を描いた。

そしてシェアハウスを立ち上げるとしても、二人では少ないので、あと一人か二人の心当たりを探そうという話になった。そして真っ先にユキちゃんにそのことを報告して、現在に至っている。

共同生活をするにあたって最初に決めたルール案は、自分の部屋と風呂以外で全裸にならないこと、お風呂でおしっこをしないことの二つだった。

この三人は生活する上での自然な相性があり、特に揉める事はなく、平和に暮らしている。

二〇一四年の三月には、この三鷹ハウスの定期借家契約が切れることになっている。その後もまた違う場所で共同生活をすることになるか、それとも別なもつと発展した形態になつていくのかはわからないが、各々が制作を続けつつ、集合しての活動も続いていくことは確かだ。



加藤袋の「ドアノブ」

マンションのドアを取り外して室内へ持ち込んで撮影をした。

思えば自分と被写体以外の人物がいる場所で本番の撮影をしたのはこのときだけかもしれない。



東さんの「ドアノブ」

そして自分以外の誰かが撮影しているところを見る経験もこの他には無かったように思う。
ドアノブ少女に続いて「刃物ちゃん」も企画されている。

デザインフェスタ出展

年に二回、1万をこえる制作者が集まり、二日間で6万人以上の来場者が訪れる巨大なイベントが東京ビックサイトで開催される。何でもアリの広範囲の分野から様々な表現形態が集結するお祭り騒ぎだ。



「せかオム」

「世界の殻を破ってオムライスになってしまいたい」というのがブースの正式な名称。出展にあたって、大きな木製の枠組みを作って他のブースよりも高さのある空間にする予定だったが、トラブルがあって半分しか設置できなかった。バタバタになってしまったが、反応は上々だった。

三鷹ハウスでの生活も落ち着いてきて、デザインフェスタに出場しようという話になった。

展示をするからには、質量を持った物質としての制作物がないと見栄えがしないため、暗室技術に対して落ち込んでいた気持ちに喝をいれて、紙にするんだという気持ちをあらたにする良い機会だと考え、改めて真剣に自分の制作と向き合うことにした。

それまでの自分の制作のスタンスとしては、どちらかといえば内輪に向けたものであり、自分自身やその制作物について既に面白がってくれる人や気に入ってくれる人に向けた閉鎖的な環境にあったため、そうした姿勢を見直すためにも、社会や外部に対して発信をする機会を持たなくてはいけないのではないかと、うすうす感じてはいた。

社会とは何ぞや？ということを論じることが避けるが、自分の制作行為はあくまでも自己満足の域を出ないものであり、誰の役にも立つことはないという自覚があったが、本当にそれなのかと自問する機会にもなった。

二〇一三年の五月に開催されたデザインフェスタへの出展までには、何とか紙にする、ということに止まったが、いざ外部に向けて発信をしてみると、

たくさんの発見と喜びがあった。自分の写真に興味をもつ人はどんな人なのか、初めて自分の制作物に触れる人はどんな感覚を持つのかなど、それまで知ろうとしてこなかった、自分にとって新鮮な情報をたくさん得られる最高の機会になった。

それまで殆ど自分のために行ってきた制作に対する意識が変わり、亡びゆく暗室文化への貢献だとか、個人が自力で叶えられる個人的な幸福のひとつとして「制作」をもつことの喜びを伝えたいという目標に繋がった。

自分の写真に興味を持つてくれる人は八割が女性だと知った。それまでインターネットとは関係ない、例えば仕事の同僚だとかに興味でヌードを撮っているという話をする。「いいねえ、羨ましいなあ」とから始まり、二言目には「儲かるの？」が飛び出すので辟易することしかなかったし、見せたくなかった。

自分にとって「外部」とはそういういった反応を示すものだと思っ
ていた（それも事実ではある）ので、ひとつ気が楽になったような思いをした。

写真というものを、生まれて初めて「作品」であると認識したという声もあつたし、たいへん意外だったのは、かつての自分がそうだったように、プリントアウトとしての印刷物と、暗室技術による光画描写の確実な違いをありありと感じてくれていたということだった。

品物として展示していた作品も、ひとつも売れないのではないかという心配とは裏腹に、購入していただける人も意外なほどいた。

それからは、自分の気持ちのために制作すると同時に見てくれる人のためにもいいものを作りたいと考えるようになった。

そしてありがたいことに、都内のギャラリーの担当者が現場を訪れており、加藤袋の写真を評価してくれて、中国上海アートのフェアという国際的なイベントの、日本のブースに作品を出さないかというオファーをいただいた。

ギャラリーとしても写真作品を評価するのは異例のことで、あちらから直接にスカウトを行うようなことも稀であるということだった。上海のイベントは二〇一三年十一月に開催される。それによって何がどうなるのかは知れないが、何にしてもいいものを作りたいという想いの原動力の一部になるだろう。

何より、衰退の一端を辿るばかりである暗室文化に、ほんの少しでも光を当てるような機会を作ることができたらと願うばかりである。

光栄なことに、加藤袋の制作にふれて写真や暗室文化に足を踏み入れたり、モノクロネガの魅力を再確認したという声もちらほらと聞こえ始めてきた。

今後、三鷹ハウスを中心に継続する活動としてはジンを発刊しようという案が出ている。

それぞれの制作を集合した魅力ある内容を目指し、加藤袋はそこではカラー写真を掲載していきたいと考えている。制作の根幹は変わらなくても、フルカラーの合同制作冊子という形ならではの活動にできたらと思う。



世界の殻を破って
オムライ又になってしまいたい
I wanna break of the world's shell and become omu-ric
Design Festa 1-31-4
5月18日 5月19日

DF37のチラシ

表面は東さんによる「女神ちゃん」のイラスト。

裏面全体に広がっている模様は、薄焼き卵の表面を撮影したものだ。

出展者

吾嬢電孝

享年27歳 出身地未定

たぶんオールドの輩からやって来たんじゃないかって気がする。
人生のほとんどが挫折で出来ており、作品は制作を通じての自己癒法のきらいがある。
前世は東歌の若くして死んだ無名の画家。スタンダム名はスメルズライクティーンズスピリット。
愛を語る愛された事はない(映画評論家のように健弁)。

趣味はお菓子作り、一度も作った事がない。
あなたと似ている気がする。



Ether44

佐賀県立有田工業高等学校セラミック科卒業生。
スーパーファミコンのRPGと刀剣をこよなく愛する。
あなたが私の作品から少しでも何かを感じ取る物があるなら、こんなに嬉しいことはない。
立ち食いそばには必ず生卵を入れます。



Tiger幸代様
ワオ



ゆみこバイセン(新谷ユミコ)
平成生まれ

求人冊子読むのも求人サイト漁るのも親の仕送りもらうのもおっさんに買かれるのもどれも憂鬱になる。
働いて自分の金で生きてほしいものを買うのが理想的だ。そんな健全な理想を抱いていたって別に職が見つかるわけでもないし自立できるわけでもない。
みんなもっと仲良くなりたいたいしだれとも関わらたくない。
いない神様を推が信じるもんか。



加藤役

1986年生まれ 愛知県出身
フィルムと縮室技術による写真作品の制作をする。22歳くらいのころ映画監督を目指し上京するが、TV番組の制作スタッフになり、その中で自分一人でもできる制作活動としてカメラと写真にめざめる。
当初より人間の身体性と精神性の境界に主題を置き、twitterでの発信や自身のホームページに興味をもった有志のモデルを撮影し続けている。



<http://sekaomu.web.fc2.com>

③ 加藤袋とインターネット



加藤 雅子

(@katarinax)

「誰もが自分自身の宇宙のスターになる才能を持っている」

加藤袋の言葉に触れているうちにこんな風に思うようになって。彼は積極的に他者に対して言葉を発することは少ない。しかし、断片的な言葉が、目に飛び込んでくるのだ。それに誘発されるように、ふと考える。

存在する肉体。

「ここから出してくれ！」と泣こうがわめこうが絶対に出られないのが己の肉体であり、そもそも存在しているという事はそういうことなのかもしれない。そういう、根源的な問いを突きつけられる。

こうして考えている自分の思念はどこにあるのか。

目に見えない「物想う自分の思念」と「外界」に境界線など無いのかもしれない。そんなことを思ったりもする。

しかし、加藤袋はそのぎりぎりの境界に目を凝らしている。

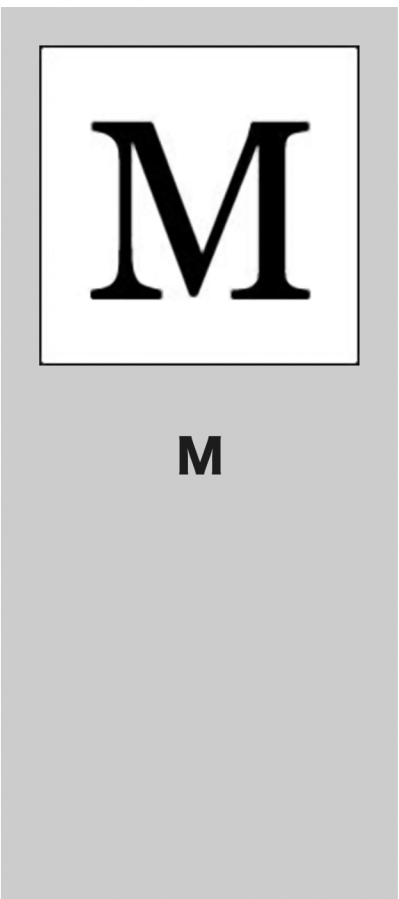
「内」と「外」とは。

自己とは。自我とは。魂とは。

そのような問いから目を背けることも、かと言って安易に答えを求めることも美しいこととしない。ひたすら、表現することそのものの意味を問いつづける。それに伴う苦しさ、不快さ、そういったものに対峙する。

その表現活動がどのように開花していくのか、あるいはまったく別の方向に発展していくのか、まだわからない。わからないにせよ、加藤袋という人物には、恒星の内核が爆縮し、その後超新星に誕生し直す寸前のような予感を感じる。

それは、表現すること、に背を向けた人間にも訴えかけるほどのインパクトを持つ。まさに「誰もが自分自身の宇宙のスターになる才能を持っている」のだ、と周囲に感じさせるほどの光を放っているように思うのだ。



加藤さんは、両極端をたくさん抱えて生きている人だと思う。表と裏くらいに隔たった側面をもちながらも、分裂せずに自立している。まるで袋みたいに。

加藤さんの両極端な面。たとえば、加藤さんは効率的なことが好きだ。スタッキングできる食器が大好きだし、料理なんか作るときは、いつ何時いかなる

状況下においても同じものが作れるように、分量や方法を規定してそれを遵守している。システマチックで現代的。古い時代のものになんて目も向けないのであろう。と思いきや、アナログ大好き。クラシックな中判カメラでガシャガシャ撮影し、デジカメよりもローライの35ミリにとびつき、精巧な機械式の時計などを見て甘いため息をつく。

その場の思いつきや感情で突発的に振る舞うことも多い。やりたいときにやりたいことをやり、やりたくなくなればやらないうといったスタンスで、赤子にもまさるほどの自由奔放さ。でも、撮影となるとガラッと人が変わる。あふれ出すアイデアと折り合いをつけながら、淡々と計画を立てていく。下準備もぬかりなく、組んだ予定は滞りなく遂行。原因と結果が一つもあぶれることなく符合していて、偶然性が入る隙なんかない。ほかにも、泥臭い精神論を熱く語ったかと思えば、冷めた顔してスーパーフラットな詭弁を弄したり、匿名的な肉体を撮ろうとしながらもアナタを前にしてし

か撮れない唯一性を写真におさめようとしたり、旧知の友のように近しい顔を見せたかと思いきや、街角ですれちがう人以上に遠く離れていつてしまったり。こうした側面のひとつひとつがビーズみたいに繋がって、加藤さんを形作っているんだと思う。

色とりどりのビーズを繋ぎ止めているもの、表と裏を貼り合わせているもの、加藤さんを加藤袋にしている理由、それが、今は写真であり制作なのだろう。制作し続けることで、加藤袋は、継ぎ目のないリバーシブルな存在にどんどんなっていくような予感がする。



スープ

(@S_oup)

偉大な過去たち。偉人はくたばっても尚、平面で蘇生する。立体を無くし、つまりは生命がくちても尚、奴らの声明は響き渡る。我々はただ耳を澄ませ熱狂する、それはもう見るにたえない間抜けなつらで。

芸術と思想。奴らは最低な死体、笑わせてくれる、

奴らは饒舌な死体（実にご立派なことである）

人々の意識を侵略し、人々の意識に寄生する悪性の魂。人々の意識によって生かされ続ける偉大な故人、個人。

非常に個人的な欲求の体現、食事に睡眠に排泄、

欠かせない性交、芸術と思想。

笑わせてくれる、最低にしたい、腹が立つ。

奴らの未来の話を。

奴らの未来、つまりは過去の未来である現在について。

我々の今夜について。

この男は今夜からそう離れてはいない過去で生まれた。

言うまでもなく女の身体から生まれたのだ。

なんとか成長し、言葉を覚え、一丁前に精通した頃、

彼に一つの希望が芽生えた。

ごくありふれた真理「女を抱きたい」当然、男は走り出した。

女の尻を追いかけ、女に頬を打たれ、女に心を踏みじられ、なじられながら、それでも女を愛し続け現在にいたる。

これが私の知り得るこの男についての全てだ。

実に人間らしく射精に満ちたこの男の全て。

彼の未来については、彼自身の口から語られることになるだろう。

私はただ願っている。

いつか饒舌な死体となった彼の声明が、人々の意識に響き渡ることを。

そしてその時は二人、間抜けなつらで熱狂する人々を、

かつての私、かつての彼自身を、

腹をかかえ、指をさし、ゲラゲラと笑ってやろうではないか。



塩ビ

(@oOoEnvyoOo)

漆黒の隙間から突然ポップコーンのように弾け出てグルグルとそこらじゅうを走り回るかと思えば、魔法のランプから立ち昇る煙のようになめらかにスリと流れ出し月の光に重なってゆつくりと溶けていく。

Twitterを始めた2009年当時から、深夜過ぎに帰宅する私のタイムラインに登場する加藤袋さんは呆気にとられる程に劇的で印象的でした。

鋭角に斬り落として体当たりで鋭く刺す、原型を留めない程に切り刻んで投げ捨てる、力任せに振り下ろして粉々に叩き割る。ときには飛び散った破片が見事に組み合わされて一枚の絵のように誇らしく掲げられる。天ぷら油から人生の模索まで、

彼にしか繰り出せない言葉で目の前に世界が造られていく。跳ね続ける自在な言葉は、彼のように表現できる能力が欲しいと嫉妬心に火をつけ、今もますます私を魅了しています。加藤袋という人物が写真を撮る人だと知ったのは、Twitterで彼の言葉と出会ってしばらくしてからのことでした。影と光の世界。黒と白と無限のグレー。作品の数々を初めて目にしたときは、静かな黒い波を湛えた夜の海が延々に広がっているようで少し怖くなり、作品に押し返され拒絶されたと感じて戸惑いました。私が私の目を通して見ている世界とはあまりにも対極にあつて、それをどう受け入れてよいのかわからず混乱したのです。

ただなぜか、言葉から抱いていた加藤袋像と彼の作品は私の中でカチリという音と共に合致しました。雑念を削り落とした静と跳躍し踊る動であり、その二つもまた対極であったはずなのに。

再び作品を目にして受けた印象は「決意」でした。それは今も彼の作品を目にするたびに呼び起こされる言葉でもあります。最初に拒絶と感じたあの感覚は、モノクロの一瞬の中に封じ込められた決意に質量を感じたからかもしれません。相反する写真と言葉が「加藤袋」にすんなりと収まるのも、双方に脈々と流れる決意という共通項があるからなのだと私は思っています。

Twitterでつぶやかれる言葉は日々の挫折も、迷いも、怒り

も、歓喜もすべて同じ方向を指して、加藤袋として生きたいという決意に包括されているのだと思っと思っていますが、私たちは気を抜くことができません。私たちが勝手に作り始めた加藤袋の幻像を、彼が彼自身の手によって時々巨大なハンマーで壊してしまうことだってあるから！予想は裏切られ、裏切りに発見があり、新たな決意が生まれたことを伝え始める。きつと作品の中でもこれから多くの裏切りに出会うことができるであろうと期待せずにはいられません。そしてまた、私は加藤袋さんに尽きない興味を持つてひきずりこまれてしまう。クルクルと首を振るライトで様々な角度から照らしだされる彼の姿をこれからも追って行きたいと願っています。



しもゆき

@simoyuki_)

加藤袋

とは

人生——生きることについて

まっすぐな人間である。

私は彼の生きざまを直接この目で見たわけではないが、
放たれる数々の弾丸のような

言葉と写真かう、そう感じざるを得なかった。

「果たしてそれでいいのか」

と問い掛けてくるようなそれは
存在を根底からざわつかせ、

ときにまるで喉元に突き付けられた
絶対零度のナイフのような鋭さを伴いながらも

煮えたぎる血のように生々しい灼熱さ(熱さ)を想起させる。

人間が人間たること。

死までたまたひたすらに生き問(い)ひ続けること。

あなたと彼の出会いで何がどうなるのかは分からないが

きっと彼の「熱(あつ)さ」を感じ取ることができるはずだと

私は信じてやまない。

しもゆき



小野ほりでい

(@onoholiday)

加藤袋と自意識と

カメラについて

未開の地の部族みたいな人にカメラを向けると最初は武器だと思っただけでかなり怖がりますが、あの反応はあなたが間違っていないと思います。少なくとも私にとっては、カメラというのは見る側と見られる側を一瞬にして振り分け、世界を二つに断絶する恐ろしい武器です。自分の自意識過剰に起因することですが、私は見られることに人一倍おぞましい恐怖を覚えるために、「見る側」になる機械、つまりカメラを構えてファインダーを覗きこんでも、圧倒的に優位な立場になってしまふ罪悪感と、それから見る側になつたなどというのとは自分の浅はかな勘違い

で、実際はその様子を神のような存在に俯瞰で見られているような被害妄想が働き、結果的にしてレンズの手前で意味のわからない引きつり笑いを浮かべて被写体を震え上がらせてしまうのです。

写真を撮るのみならず創作全般に言えることかもしれませんが、作るということはつまり上手くやろうとする自分の自意識との戦いという面もあります。

上手くやろうとする自分がいるということそれは自分が写真を撮る人、線を引く人、歌を歌う人だけではなく「それをうまくやろうとする人」を合わせた二人に分裂してしまつていくわけで、その分野で熟練している人というのはだいたいこの自意識を排除する術を知っているの

ではないかと思えます。

さて、加藤袋さんから自身を紹介する原稿を依頼された折、カメラや写真について全くろくな知識も感性を持ちあわせておらずその自覚もある私は内心焦ったのですが、親切にも「写真論というより僕が現時点で死んだときの弔辞みたいな感じで」と助け船を出して頂いたのでお言葉に甘えますが、本当に惜しい人を亡くしたと思います。彼、加藤袋という人の特殊性を端的に言い表すならあらゆる行動に対して自意識、あるいは雑念と言うべきものが徹底的に排除されるということでしょう。ネット上で彼の発言を見て頂ければ分かりますが、彼は実に色々なことを考え、発言するにも関わらず、その一つ一つの思考が横のつながりを持ちません。あるひとつのことを考えたり、掘り下げて発言しても、次の瞬間には全く別のところで、別の何かについて考えていて、そのザッピング、テレビのチャンネルを次々に替えるような過程に全く感情というか、人間味が感じられず、私は彼に対して何年も前からずっと尊敬と畏怖の念

を抱き続けているわけです。

私はカメラマンほど、ツイッターをやって損な人種はないと思っています。カメラマンは自分の撮った写真に決して写り込みはせずに、どう考え、何を考えながら撮ったという手の内を隠しつつ、それを見る側の想像に任せるといなのが勝負所ですから、ツイッターのように、頭の中身を垂れ流すようなことをすれば、自分の写真に奥行きがなくなってしまうはず。しかし、加藤袋氏の人間味のない発言の数々は、彼の写真にますますの奥行きを与えている気がします。彼の発言の多くは、思考の骨格だけを捉えたようにシンプルで装飾が省かれており、あるいは言葉の持つ伝えるという目的を逸脱して、思考の過程で生まれたゴミのように粗雑に放り出されているのか定かではありませんが、他人の自意識に闖入してあげつらっている悪意の塊というべき私のような人間にも美しく、衛星軌道上を意味もなく永遠に漂い続ける宇宙ゴミのように美しく映るのです。ネット上でたまに、テカテカのギターに反射して上半身裸の

おじさんが写り込んでいる写真とか、ピンクフロイドのアルバムジャケットに反射してそれを撮っている仏頂面のおじさんが写り込んでいる恐ろしい写真が出回っています。やはりカメラを持つ場合に最も恐ろしいのは自分の自意識が写り込んでしまうことでしょう。この二人のおじさんは、ギターとか、ロックバンドとか、かつこいものに自分を投影してある種陶酔していたのかもしれませんが、それがたまたま反射するものだったばかりに、カッコいいものに自己投影するカッコよさとか

け離れた中年という図式を暴かれ、さらに残酷にも永きに渡り白日のもとに晒されるわけです。ですから、見る側になる人間は常に俯瞰で見られる危険性に対峙しており、それでもファイインダーを覗くのは、その覚悟のある人だけであるべきなのです。皆さんは加藤袋の発言に加藤袋が、加藤袋の写真に加藤袋が写り込んでいるのを見たことがあるでしょうか？私はまだありません。

もし彼がしつぽを出すようなことがあれば、それこそ大勢で袋叩きにする所存です。



Raswell

(@Luswell)

最近、インターネットの知り合いとたまたま会って話しているときに、「加藤袋のサイトを見たけどダサかった」みたいな言葉が相手から出ました。わた

しはわたしで「ダサイ」かどうかを判断する目などないので、「フーン」と言うしかなかったのですが、そもそも加藤袋のサイトに「ダサく思われるかもしれ

しれない」という不安を見出そうとすることがズレているんじゃないかしらと思います。

自分の作品や態度について言いつけをしないというのは結構難しいと思います。特にきちんとモデルを用意してモノクロで人物写真を撮るとするのは、カラーで風景とか動物とかを撮るのと違って偶然頼りの部分がほとんどなく、撮影者の意図だけでほぼ百パーセント中身が満たされている作品形態のような気がして、そういう作品形態でやるかどうかでも作品に「自分が濃密に出てくるから、大多数の人の場合、そこに恥ずかしさが付随してくる。「照れ」と言い換えてもいいです。そしてボロを出さないようにしようという意図が働く。わたしも小説をやっているときに、つい照れてしまつて本来書こうとしていたものを折り曲げてしまつて、変に斜に構えたりして本質から自らを遠ざけた苦い経験が多々あります。加藤さんにはそういうところが全然ない。加藤さんの作品は極めてストレートに存在している。単なる開き直りとも違う。安易でインスタントな真

理に飛びつかず、手間を惜しまず、思考を重ね、やりたいことをただそのまま実直に遂行してくる。そういうストレートさがあるからこそ作品がクリアになつて、逆説的に加藤袋の意識が作品から消滅している。これは結構奇跡的なことのように思えますし、それこそが加藤袋の本当によいところだと思います。

我々が言うダサイとかダサくないというのは、もちろん見る側の感想としてあつてもいいとは思いますが、加藤袋の作品や姿勢とはまた別の場所に存在しているものだと思います。つまり作品に何の意味も為さない。そこにあるのは加藤袋の世界であり、我々の世界ではないからです。そして、わたしたちにだつて実はこういつた世界を作ることが出来るんじゃないかと思わせてくれる何か有加藤さんにはあると思います。ダサイって思われるかもとか何とかビビる心が作品を曇らせるのだ。

わたしは加藤さんとプライベートでそれほど親交があるわけでもないし、自身で写真をやっているわけでもないので、この紹介文の依頼を受けたときに、

「みんなが知っている当たり前のことを書いてしまうんじゃないか」という危惧がありました。誰も知らない加藤袋の裏側に迫ったり、その作品を斬新な視点で批評したり出来る人の方が適

任なのではないかと恐縮たわけですが、選ばれた以上、当たり前前のことを当たり前のように平易に書くのがわたしの担当でもいいかなって思ってたこんなことを書きました。



伊丹松 圭太

(@portabletermina)

どしやめしやに雨の降る26時にこれを書いてる。白と黒の間の色しかない時間帯に加藤袋の写真は似合いに思える。光の実力を問うみたいなモノクロだ。シャッターの奥に誘った光彩の「地力にだけ頼った写真は、赤や青や緑がある世界よりずっと鮮やかに被写体の身体を克明にする。タイムワープを思い出す。図書館で、誰も本を物色しにこない不気な書架の影にワームホールを見つけたとして、そこへ飛び込んだとして、自分の身体はどこからどこまでを次へ連れていってくれるだろう。

ふつと考えることがある。それは取りも直さず「どこからどこまでが身体なのか」という与太話に展開する。今朝剃つた顎髭は？昨日の晩揃えた前髪は？今夜帰ったら切ろうと思ってる爪は？切り離された、かつて身体であったものたちは引き続き身体と呼べるのか？
イヨマンテを眺めながらそんなことを考えていた。加藤の写真が、髭や髪や爪と同じく、本体と距離を持った、距離を持っているだけの、ただの身体に思えたから。彼の作品は、美容室でケープ越しに腿の上へ溜まつ

た髪の毛に触れるときと似た手触りを喚起する。ささやかな命に触れる触感と、何某かへの後ろめたさ。それから、意識が身体に不信を抱いてわずかに解離する自覚。それが堪らなく心地

良くて、このことがそのまま彼が暗室を持つていることを寿ぐべき理由になる。素敵な写真を撮ってくれてありがとう。

台風は東京を逸れていった。



尊師

(@drrrip)

(例)

四則演算から追放された数式

(例)

高速回転する規律的無軌道細胞

(例)

GFTしたばっかのMIXTAPE

(例)

肉塊二倍のティーバッグから抽出された究極の個人、だがマテリアルとしては無機物

(例)

増殖と収束

「加藤袋を一言で説明しろ」
一九七四年、サウスダコタ。

俺がフリーメーソンの入団試験で頭を抱えた難問だ。

加藤袋には顔が無い。写真にも言葉にも顔が無い。加藤袋入門として大切な要素のひとつがこの「顔」そして名前「加藤袋」だ。今回初めて彼の作品を見る／見た人も少なくないだろう、無駄に説明しすぎるのも野暮だ。家に帰って夕飯のバターチキンカレーを平らげてから「加藤袋を一言で説明しろ」の回答を考えてみてくれ。可能なら、クソをひねり出している間に考えるのが一番いい。

真理は真理を突こうとして見出せるものではない。複雑な遠回りを高速で繰り返し返す内に周囲のルートを網羅、結果的に誰よりも早く珍宿に到着する加藤袋の言葉と創作は俺に多くの転換

を与えてくれた。すべてをひっくり返すため信頼出来るこんなまるごとバナナのような表現者はそう簡単に現れない。今回の展示の実現を心から嬉しく思う。



彦坂 一慶

(@osoroy)

加藤袋は、「自分にとつても重要なことは何か」を知っているか、あるいはそれを切実に探していて、それを最優先にして生きている人だ。

私が小学校の頃、ミニ四駆という玩具が流行ったことがある。私はミニ四駆が好きだった。ミニ四駆はキットを買って自分で組み立てなくてはならなかった。カーブのあるコースを回るためのローラーを付けたり、タイヤを換えたり、さまざまな工夫をして組み立てる。私はそれが好きで夢中になってミニ四駆を組み立てた。おこづかいをすべて

費やして、本屋に行けばミニ四駆についての情報のある書籍を買ってくれと親にせがんだ。今思えばだが、子供のころの遊びで自分をもっとも好きだったのがミニ四駆だったのだと思う。自分で工夫して組み立てた車が、手を離せば驚くようなスピードで走っていく。それがとてもうれしかった。

そんなミニ四駆との関係はある日あつけなく終わった。簡単な理由で、友だちがみんなやめてしまったからだ。次のブームはポケモンのカードゲームだった。いつものようにミニ四駆を

走らせて遊ぶものだと思つて友だちのところへ行き、「もうミニ四駆はええやん、お前もポケモンカードやろうぜ」と言われ、ショックを受けたことをよく覚えてる。友だちはそのとき確か六人集まっていた。転校の多かった私にとって、友だちは貴重で、重要だった。その日、ミニ四駆のパーツを買うためにもらつたおこづかいで、ポケモンカードを買った。私はそのことを親に言えなかつた。自分が好きなものを六人の友だちと遊ぶために捨てた、そのことを恥だと感じたのだと思う。

このような、共同体の一員であるために個人的な幸福を犠牲にした経験が、多かれ少なかれほとんどの人にはあるのではないだろうか。家で本を読みたいのにクラスみんなでカラオケに行こうと誘われて断れなかつたとか、そういう経験だ。私たちは個人的な幸福というものを優先した瞬間に、共同体から疎外され、孤独になる。仲間はずれになつてしまう。それを恐れて、私はミニ四駆を捨て、ポケモンカードを買い、共同体の一部となつた。それで得たものは、恥

の意識と、ポケモンが書かれたただの紙だけだつた。何もいいことはなかつた。

一九七〇年、いわばロックの全盛期、世界最大規模の動員数を記録したワイト島音楽祭の様相は、現代を生きる私たちが想像するような平和的なロック・フェスではなかつた。延べ六十万人の聴衆のうち、入場料の３ポンドを払わず、フェンスを破壊し警備員を殴つて押し入つた数は五十万人を越すという。東京ドームの収容人数でやつと五万人、それが丸ごと暴徒と化するの、悪夢としか言い様がない。彼らの要求は愛と平和、自由の祭典であり、商業主義など言語道断だつた。主催者は「物を壊すな、金を払え」とマイクを通して怒鳴り、聴衆は物々しい警備に「まるで収容所だ」と怒りを露わにした。あちこちで乱闘が起き、設備は破壊され、過激派がステージに乱入し、投げられた火花がステージに引火した。人々は愛と平和のロックの祭典で、熱狂と一体感に包まれていた。当時デビューから三年目、三十五歳のレナード・コーエンは、狂騒をよそに、楽屋のトレ

ーラーで眠っていたという。午
前二時に揺り起こされ、ジミ・
ヘンドリックスの演奏によつて
聴衆の興奮がさらに増したステ
ージに上がると、聴衆に向けて
こう言い放った。

「君達は六十万人もいるのに、
じつに無力だ」

そして、群衆ではなく、一人
ひとりに、こう呼びかけた。

「明かりを灯してくれないか、
君達を大きな塊として見たくな
い、だから一人ずつ火をつけて
くれ」

加藤袋について考えたときに、
私が連想したのが、幼い頃のミ
ニ四駆と、レナード・コーエン
のこの言葉だった。レナード・
コーエンは、一体感を求め大き
な塊の一部になることを「無力
だ」と否定した。自らの意志で、
それぞれのやり方で、ひとりで
明かりを灯すこと、それだけが
希望を生む、と言いたかったの
だと思ふ。

加藤袋という人間とその作品
から、私がワイト島のレナード・
コーエンを連想するのは、彼が
自分の意志で、自分の方法で、
ごく個人的な幸福を最優先にし
て生きているのだと伝わってく

るせいかもしれない。彼は暗闇
の中ひとりで火をつける。私た
ちがそれを見ようが見るまいが、
いずれにせよ彼は自分のマツチ
を擦るのだろう。私たちがそれ
をどう思うかに関係なく。

私はきつとあのとき、興味の
ないポケモンカードではなく、
ミニ四駆をやるべきだった。そ
れに、憂うつなクラス会に行く
のではなく、家で映画を観るべ
きだったが、個人的な幸福を最
優先にして、ひとりぼっちにな
るのは、怖かった。勇気のいる
ことだった。それでも私はあの
とき、ミニ四駆をやるべきだつ
たのだ。夢中になれることや楽
しいと思えることは、そんなに
簡単に捨てていいものではなか
った。それだけが希望を生むの
だから。私がそう考えられるよ
うになった要因のひとつは、加
藤袋の存在だったと思ふ。

加藤袋という人物と作品につ
いて考えるとき、私はミニ四駆
と、レナード・コーエンの言葉
を、思い出す。

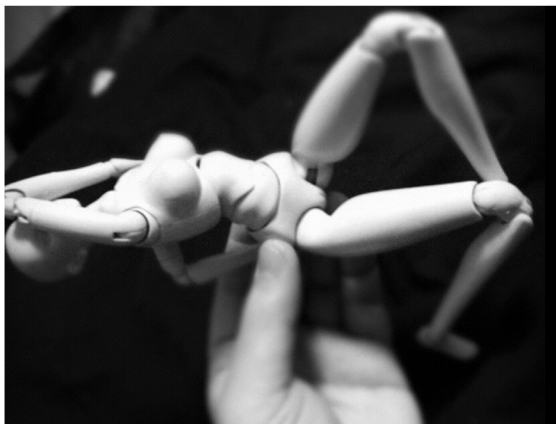
あなたは、何かを思い出すだ
ろうか？

加藤袋

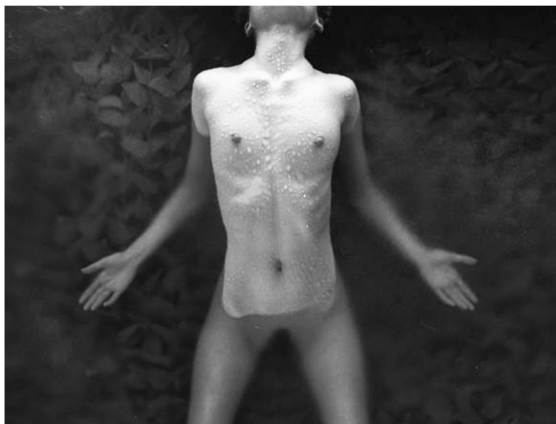
④ 加藤袋のこれから

これからつくりたいもの

写真の場合「1つのカメラ、1つの感剤、1つのテーマ、1つの薬品、1つの方法をまずは理解し、1つずつ変えなさい」というセオリーがあるようだ。早い人は早いですが、自分の場合は残念ながら遅い。



ポーズingの参考にしようと思ったが脚が長過ぎて使えなかった人形。想い通りの造形の人形があれば構想がラクになるのになと思っていた。



「こういうものを撮りたい」という想像がそのまま現実になることは快感だ。結局それが一番好きで、きつとずっとやめられないだろうと思う。



プロニカを落して最初に詰めたフィルムの最初の1枚。部屋の鏡に映っている自分を撮った。よく見る図だが、撮ったことがなかった。



木材とビニールシートで室内に小規模なプールを設営したときの様子。暗黒に背景を与えると考えたとき、真っ先に思い浮かんだのは「水」だった。

カメラを持ち始めてからずっと人体ばかり撮り続け、暗室を持ってからはひたすらそのネガをプリントし続けてみて、それぞれの見地から、どんなプリントをしたいのを撮りたいのかと、どんな撮影をしたものをプリントしたいのかという線が交わってきたように思う。

もちろんそのどちらもまだまだ至らない点が山ほどあるので、これからは今までのようにどちらかに集中するのではなく、同時進行で発展していきたい。

まずひとつに、大きいプリントを作りたいということが挙げられる。デザフェス∞の時点で作ることができると最大のサイズは大全紙からのF10号パネルへの仕上げだが、そう遠くない未来にはロール紙というタイプの映画紙を使ったもっと大きな作

品にも取り組みたい。ロール紙はおよそ108cmの幅をもつ映画紙が20E巻かれたもので、必要な分だけ引き出して使うものだ。

世の中にはこの長い紙を切らずにそのまま長い写真に仕上げてしまうプリンターも存在する。そこまでいくとちよつとした工場のような暗室が必要になるため、これが実現するのは随分先の話になってしまいが、F40号やF60号までの大きさであれば、そこまで強烈な設備や技術は求められないので、今はできなくても手が届くだろうと思う。

もうひとつは、巨大なプリントに仕上げるに足るだけの情報量のあるネガを作りたい。プリントは基本的にはネガの情報を頼りにするため、肝心のネガの調子が悪ければ、引き出せるものの上限も下がってしまう。



フィルムを缶で現像する方法
フィルムをリールにくるくと
巻いた状態で封入して薬液を順
番に注入・攪拌・排出する。
このとき薬液の性質や希釈率、
攪拌の頻度や強さ、処理時間、
薬液の温度などで、現像結果が
大幅に変化する。

ネガの物質的特徴はフィルム
の特性および撮影方法と、その
現像方法によって決まるが、プ
リントを始めるまではほとんど
固定された撮影を繰り返してい
たため、それが基準となる感覚
に落ち着いた。今後はこれまで
の蓄積を基準に、何をどうすれ
ば大きなプリントに見合うネガ
になるのかを知りたい。

しかし、大きくプリントをす
る設備や技術だとか、ネガのコ
ンディションの追求だとかは、
ハード的な、あくまで物質的な
側面に過ぎない要素であつて、

「どう」作るかの域を越えない。

では「何を」「なぜ」撮りた
いのか、また撮るべきなのかを
考えたとき、やはり究極的には
人間（生命）に戻つてきてしま
うのだとは予想はしているけど、
少しかかり道をしたくなつた。
人間の被写体を撮影している
とき、いつも人間は人間の形を
していて人間になつていなのだ
なということに感心するのだが、
もし人間が今の人間の形をして
いなかつたら、今と同じように
「その形」を人間の形だなあと
感心したのだろうか？という想像
をすることがよくある。

それとは少し違うが、被写体
を個人として撮影することをし
ないために顔を外してはいる
ものの、実際の人間を撮ってい
る以上、現実的にその肉体はあ
る個人のものであるという点に
も無視できないものがあるよう
に思う。その他にも、実在する
もの、実在する命を題材にして
いるがために発生する要素とい
うのはたくさんある。

モデルさんには現実的な都合
があるし、それでなくともたと
えば人間は空中に浮かび上がる
ことができない。水の中に潜り
続けることもできない。バラバ
ラに飛び散ることもできない。
家に帰らなくてはならない。食
べ物を摂らなくてはならないし
眠らなくてはならない。呼吸を
して震えるし、疲労もする。

そもそも写実する道具を使い
ながら眼前にある事実注文を
つけるのはまったく無意味だが、
もし仮に、宙に浮いたまま微動
だにせず何時間でも撮り続けら
れる生命があるなら、撮ってみ
たいと思う。何度も繰り返し撮
影ができれば、撮影方法を百通
りも試したり、感剤や薬品の組
み合わせも正確に比較できる。



そんな超生命がいなくても、そうした実験をしたいなら単に野菜だとかレゴブロックを撮ればいいのだけど、最終的に生きた人間を撮ることに立ち返ることを思うと、人間の形からあまり離れたくないし、贅沢を言えば、作りながら覚えたい。

人間でない人間、個でない個ということを想像しているうちに「人間の形をしている物体」というところに落ち着いた。

あくまでも今までのように最終的には生きた人間という解へ舞い戻るはずだが、やはりそこへ帰りたいたいと願う気持ちの確認も兼ねて、少しだけ違うものを撮ってみようと考えている。

これも結局は、こうして文章でその意味を説明できるのならしてしまった方が良く。そうできないうるものを撮るべきだし、そう遠くない未来に、実際の写真作品として発表できるはずだ。

新たな「道具」

カメラの他に自分自身の手繋がる「道具」があれば何だろう？と制作をしつつ考えていたが、それは「石膏」であると思えるようになってきた。今後は石膏との格闘が続くだろう。

あとがき

首からカメラを提げたメガネの日本人、なんてイメージも今は昔。現在では殆どの人がデジタルカメラとして機能する携帯電話を肌身離さず持ち歩き、目の前で起こっている現象を画像として即座に記録できるような、たいへん便利な世の中になりました。家庭用のプリンターもまったく珍しくなくなり、DPE店の出番も少なくなりました。DPEはDevelopment - Printing - Enlargementで、現像・焼き付け・引き伸ばしを意味します。

写真はいまや特別な準備や投資が必要な表現手段ではなく、いつでも誰にでも扱える身近な装置になったのです。

写真表現にまったく興味を持つことがなかった僕でさえ、携帯電話がもつ機能のひとつをきっかけに、そこから地続きに繋がっていたすばらしい世界の一端を垣間見るようになりました。生きがいを見つけたと言っても過言ではないでしょう。

それはカメラに限ったことではないはずですが、遠くにあったあらゆるものが、技術の進歩などによって、この手に触れられるところまで近づいて

くすることは、誰しにもそういったきつかけを与えてくれることに他なりません。

人々が何かを表現し、何かを実現し、何かに生きる喜びを見出してきたことは、それがあある種の「文化」であつたことを意味します。

暗室というのは、世の中が変化するにつれて便利になつたことや、必要だとか必需とされている要素の移ろいなどによつて、着実にそれを生業としたり趣味として打ち込む人が少なくなつてきている文化です。

メーカーは続々と関連用品の生産を終了し、高校や大学の写真部からは暗室が消滅し、一部の人々の間では「終わった技術」などと呼ばれ、保管されていたネガはすべてデータに変換して焼き捨てられるなど、刻々とその「生態」が失われつつあります。しかし、それでもフィルムや暗室文化を愛し続ける人々がいることも確かです。

僕はこれからも、この文化が本当に死んでしまふその時まで、消費者として暗室用品を購入し、制作者としてこの暗室から生まれる表現を発信し続けたいと思います。

加藤 袋

イェロウ

<http://ffkrow.jpn.org>

FFFKROW.BLOG

<http://ffkrow.blogspot.jp>



ffkrow@gmail.com

皆様へのおねがい

加藤袋のプリントを…

- ・商品として置いていただける店舗に心当たりがある方
- ・展示させていただける機会に心当たりがある方
- ・購入したい、または品物をご覧になりたい方
- ・何らかの業務に利用されたい方

暗室について…

- ・モノクロネガのプリントを依頼したい方
- ・プリントする場所がないため暗室を借りたいという方
- ・これからモノクロネガやプリントを制作してみたいという方



ご連絡ください

